

二次元ドリームパルス

18
未 満

サンダークワッパズ! リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN

パラサイトクライシス

試し読み版

羽沢向一
挿絵：緑木邑

フレア/ダークサン

Flare

スーパーヒーローチーム

「サンダークラップス」の一員。

凛とした力強い美女。

悪の科学者ドクター・ディスオーダー

に創られれた人造人間。

頑強な肉体と怪力を持つ。



Dark sun

スターサンダー

Star thunder

「サンダークラップス」のリーダー。

端正で気品のある大人の美女。

地球人の母と宇宙人の父を持つ混血のミュタント。

電気を自在に操る能力を持つ。



サンダークラップス!

リボン
CHARACTERS パラサイトクライシス

ローズデバイス

Rose device

「サンダークラップス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼い
ころに重傷を負い、体内にナノマ
シンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着
して闘う。



Contents

第一章

寄生開始

パラサイトヒギンズ

004

第二章

寄生調教

パラサイトドミナンス

028

第三章

寄生侵食

パラサイトインバージョン

063

第四章

最終寄生

ファイナルパラサイト

116



オセロット

Ocelot

「サンダークラップス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な
美文。
南米の自然の精霊たちに認められ
たシャーマンで、精霊の力を宿し
てジャガーの獣人に変身して魔法
を使う。

マスターパラサイト Master parasite

自分が開発した寄生生物ダークパラサイトを女性スーパーヒーローたち
に寄生させて支配することをたくらむマッドサイエンティスト。

第一章 寄生開始

パラサイトビギンズ

東京都豊島区池袋最大のランドマークである高層ビル、シャインランド60の周囲を、長蛇の列が取り巻いていた。係員が四列縦隊にまとめた人数は、何千人にもなる。

人がひしめく列と列の間を、ファーストフードの店員にも見える制服を着た警備員たちが歩きまわって、ていねいな言葉づかいで列を乱さないように注意してまわっていた。

今日はシャインランド60のイベントスペースで、女性アイドルグループ『みらくるワッフル』のCDお渡し会がある。憧れのアイドルが今日発売の新曲CDを、直接ファンに手渡ししてくれる夢のイベントだ。

大行列の三分の二はやはり若い男だが、女のファンも多い。みらくるワッフルのメンバーの顔写真バッジやキャラクターグッズでキラキラと飾っているのはあたりまえ。派手でかわいいステージ衣装のコスプレ少女たちも多数いて、期待に大小の胸をふくらませ、ファンならではのマニアックな話に花を咲かせる。

青春の香りと熱気がむらむらと立ち昇る極彩色の大行列の中には、日本人以外のファンも目についた。ネットで日本のアイドルの動画を見てファンになり、わざわざ来日してイ

ベントやライブに参加する外国人も多い。

かなり早い時間にシャインランド60に到着したファンたちの中にも、四人の外国人女性が並んでいる。ハイティーンの金髪碧眼の白人の美少女がひとりと、三人の大人の女だ。大人はそれぞれ黒髪の白人、黒人、ヒスパニックで、みらくるワッフルのファンとしては年齢が高い。しかし若い少女と同じように、シャツやスカートにメンバーの顔をプリントしたバッジやグッズをちりばめている。

四人が英語でみらくるワッフルの魅力を語り合っていると、行列の間を巡回している男性警備員のひとりが、さりげない歩調で近寄ってきた。

三人の大人の女が同時にさっと動いて金髪の少女をかこみ、鋭い視線を警備員へ向ける。やたらと体格のいい警備員が、オペラ歌手じみたよく通る声量の日本語で告げた。

「おしのびで来日中のアメリカ国務長官の娘リンダ・バーンズとお供のSPだな。俺は『エンフォーサーズ・オブ・エวิล悪の執行者』の現場工作員だ。父親への見せしめのために、おまえを大観衆の前で派手に殺せという依頼を受けた」

VIPの殺害が口から出た途端に、アイドルファンに変装した三人の女SPが躊躇なく拳銃を抜き、なんの合図もなく同時に警備員を撃った。三人と相手との距離は一メートルたらず。狙いを外しようのない至近距離射撃だ。銃弾の雨はひとつも目標はずれない。

マッチョ警備員は射撃になにも対処することなく、悠然と全弾を受け止めた。制服の布を破った弾丸は、たくましい胴体にぶち当たってあっさりと跳ね返される。制服の中に着けた防弾装備の効果ではなかった。剥き出しの顔の眉間や頬や鼻に当たった銃弾すら、皮膚にかすり傷もつけられずに、クリーム色の靴のまわりにバラバラと落ちてしまう。

短時間に轟く銃声を聞いて、周囲の人々が悲鳴をあげて、いつせいに駆けだした。

警備員は逃げる群衆には目も向けず、叫びと足音を背にして、傲慢にせせら笑う。

「抵抗も逃亡も無駄だ。エンフォーサーズ・オブ・エヴィルの現場作業員が全員オフビートだという情報は、アメリカ政府のSPなら頭に入っているだろう」

懸命に逃げる群衆からも、オフビートだ！ オフビート犯罪者が出た！ と、いくつもの声が聞こえてきた。

調子^{オフビート}つばずれ。

それは常人を超える多種多様な能力を持つ者たちの総称。

かつて冷戦時代に、『スーパード・オフビート』と名乗る超人がはじめて公然と人々の前に出現して、核兵器テロからワシントンD・C.を救った大事件をきっかけにして、無数の超人たちが表立って活動をはじめた。様々な理由で能力を得て、いろいろな局面で能力をふるう超人たちを、人々は最初の超人にちなんでオフビートと呼ぶようになった。

「依頼人から目標以外の人間を殺すなど言われているから、見物人は安心してツイッターやフェイスブックに国務長官の娘が殺される姿を拡散しろ。さて、リンダはどういう死に方をしたいんだ？ 俺のおすすめはVIPとSPがなかよくつぶれて、アスファルトに脳と内臓をぶちまけて、ごわっ！」

マッチョの頭上から砲弾のように白い影が飛来して、白いブーツが肩を蹴りつけた。至近距離の銃撃をものもしない頑強な身体が、背後へ飛ばされ、すっかり人がいなくなつた広場に腰を打ちつける。

マッチョを蹴り飛ばした白い影は、ふわりと国務長官令嬢とSPの前に着地して、背後にかばつた。

「そこまでだ！ おとなしく投降しろ！」

凜とした声が、高層ビルの前に響くとともに、背後の令嬢が希望に満ちた声で自分を助けてくれる女の名を呼んだ。

『『太陽^{フレア}火炎』！ ジャパニーズ・プレシヤス・スーパードヒーロー！』

オフビートには超能力を私利私欲のために悪用する者が多かった。だが最初の超人スーパーオフビートに感銘を受けて、人々を護り、救うために活動するオフビートも大勢現れた。彼らはコミックのキャラクターになぞらえられてスーパードヒーローと呼ばれる。

フレアも日本で活動するスーパーヒーローのひとり。

ひゅうがきらら

本名は日向燦^{ひゅうがきらら}。その正体はもちろん世間には秘密だが、数年前に悪の天才科学者によって造られた人間だ。幸いにも製造者から逃亡して、ヒーローとなった。

生まれてまだ数年だが、二十歳くらいに見える美女で、勇猛果敢な美貌を無造作に切ったような短髪が縁どっている。

抜群のプロポーションを、チアリーダーを思わせる白いミニスカートのコスチュームに包み、しなやかな両脚には白いロングブーツ。高く隆起した胸では黄色い炎の模様が踊り、背中では腰までの長さの白いケープがひるがえった。

蹴り飛ばされたマツチョが不敵に笑い、自信に満ちた目でフレアをにらむ。

「おまえがフレアか。東京でこのところ人気が出てきた若手のスーパーヒーローチームサンダークラブス

『雷鳴団』のメンバーだな」

「エンフォーサーズ・オブ・エヴィルは金で動く傭兵だろう。信念のないおまえが、スーパーヒーロー相手に無理に闘う必要はない」

「金で動くからこそ、仕事をやり遂げるのが傭兵の信念さ！」

立ち上がったマツチョの背中から虹の色に輝く美しい光があふれ出し、蝶の羽そっくりの形に左右へ大きく広がった。同時に両眼から、羽と同じ虹色の美しい光がレーザーのご

とく放たれる。光線がフレアの胴体の脇をかすめ、背中のケープの端に穴を開けて、背後のリンダへ飛ぶ。

フレアの顔に、しまった、という表情が描かれる。だが虹色の光線がリンダをかばうSPに届く前に、なにかにさえぎられたように空中で止まり、その先には進めなくなった。

リンダたちの頭上に、エメラルド色に煌めくシルエットが降りてきて、空中に立った。透明な壁に護られたリンダが、また歓声をあげる。

「サンダークラップスの『^{ローズデバイス}薔薇の装置』！ ジャパニーズ・ブリリアント・スパーヒーロー！」

「リンダさんたちの周囲に、あたしがバリアを展開しました。物理的にも化学的にも攻撃は無意味です」

ローズデバイスの全身を緑色に輝かせる金属のアーマーから、落ち着いた女の美声が出る。アーマーは全身を隙間なく被い、装着者の顔も髪も素肌も見えない。しかしアーマー自体が美しい大人の女のプロポーションを再現して、中にいる人物の魅力を想像させずにおかない。

なめらかな曲面を描く胸には、そだけ緑の上に真紅の薔薇の花の浮彫が咲いて、目を引くエレガントなアクセントになっている。それもまた大人らしい。

だからこそ誰も思いもしない。アーマーの中にいるのが、北原静子きたはらしずこという十八歳の小柄で華奢な少女だとは。それを知っているのはサンダークラップスのチームメイトだけだ。

静子は幼いころに、科学者である父の実験中の事故に巻きこまれて、脳と全身の神経を失いかけた。父親は開発中のナノマシンを娘の体内に注入して、脳と神経を代替させて、人格と記憶を維持することに成功した。

静子は脳が機械で、身体が生身という世界でも類のないサイボーグとなった。そして自ら開発したアーマーを身体にまとい、脳に接続して、スーパヒーローとなる。

エメラルド色の金属マスクが、蝶男をにらむ。

「データと照合しました。顔を変えています。あなたはエンフォーサーズ・オブ・エヴイルの古参メンバー、コードネーム『虹の蝶』レインボーバタフライです。もうリンダさんたちにはなにもできません。投降してください」

ローズデバイスの言葉にレインボーバタフライは従ったようで、二度目の眼球からの虹色光線はなかった。しかし緑のアーマーの背後に、いきなり高さ数メートルの石積み壁が立ち上がった。ローズデバイスが反応する前に厚い石壁が直角に折れて、アーマーの背中に激突する。

防衛システムが働き、大質量をぶつけられた殺人的な衝撃は、中のスレンダーな人体に

は伝わらない。それでもアーマーが空中からアスファルトへたたきつけられるのは避けられなかった。

「あああっ!!」

アーマーに備わるあらゆるセンサーが、一瞬前まで石壁が存在しなかったことを告げていた。

（石壁をテレポートさせたの？ いえ、石壁専門の操作能力？）

疑問を浮かべる間にも、ローズデバイスの周囲に次々と石積の壁が立ち上がり、四方から雪崩のごとく倒れて落ちてくる。たちまちアーマーが大質量の下敷きになった。単純な暴力だが、凄まじい威力なのは間違いない。

「ローズッ！」

フレアは叫び、チームメイトに駆け寄ろうとする。だが背後からレインボーバタフライに羽交い絞めにされた。優雅なコードネームに似合わないいかつい顔がニヤリと笑い、七色の光の羽が猛烈に羽ばたく。

フレアとレインボーバタフライの身体が、ロケットのように凄まじいスピードで垂直に上昇して、地上からは見えなくなった。

さらに次々と石壁が出現して、リンダとSPへ押し寄せる。無防備な四人はすぐにも両

手でたたかれた蚊さながらにつぶされそうに見えるが、石壁は透明なバリアにはばまれて危害を与えられないでいる。

石壁の山の下から、ローズデバイスの声が響いた。

「こんなことをしても無駄です。リンダさんたちを包むバリアは、あたしを生き埋めにしても、自動的に作動しつづけていますから」

ローズデバイスはすでに、石壁の主の姿をとらえていた。アーマーから飛ばしたいくつものテントウムシサイズのドローンのカメラが、映像を脳に直接送信してくる。

石壁の主は、どこで着替えてきたのか、中国の王宮の高官風の黄色い衣装を着ていた。中国の歴史映画の出演者が撮影現場から駆けつけた、と言われたら信じてしまいそうだ。

脳内データは瞬時に検索できた。コードネームは『グレートウォール』。万里の長城の英語名だ。中国人ではなく、ただの中国史マニアらしい。世界の司法機関に最近存在が知られたオフビート犯罪者で、石積み of 壁を出現させ、自由に操る能力の仕組みは不明。いつの間にか裏社会の傭兵集団エンフォーサーズ・オブ・エヴィルに加わっていたようだ。

(こんな石くらいで！)

アーマーの出力を上げて、大型クレーン並みの力で、自身にのしかかる石壁の山を持ち上げる。積み重なった石壁がずるずると滑り落ちていく。

だが新たな石壁が次々と出現して、ローズデバイスに落ちてくる。たちまち山は前よりも大きくなった。

「馬鹿め！ 俺はいくらでも壁を出せるぞ！ アーマーごとおまえを完全に押しつぶしても、まだバリアは残っているかな？ ぬはははははははっ！」

下手な役者のオーバーな演技そのまま身振り手振り入りで高笑いするグレートウォールの背後に、青白い蛇のようなものが空中をくねって迫った。

哄笑をあげつつづける男の首筋に、青い蛇が触れる。

「はぐあっ！」

グレートウォールの全身が硬直して棒立ちになり、ガクガクと震える。強烈な電撃を受けて、感電しているのだ。無限につづくと思えた石壁の出現が止まる。動物のように動いてローズデバイスを襲う石壁も、静止して、ただの場違いなオブジェと化した。

首筋にからみつく電光が消えると、グレートウォールは漫画のように髪を逆立てて、ふらふらになりながらも身体を反対側へ向けた。

目の前に、赤と青のコスチュームを着た女が立っている。

赤地に青い稲妻の模様を走らせた薄いコスチュームは、ピッチリと身体中を覆っている。ただ両脚の太腿部分は透明なので、ハイレグのワンピース水着を着て、ロングブーツを履

いているように見えた。

おかげで女体の輪郭が鮮明に表れている。豊満な乳房、なめらかにくびれたウエスト、高く持ち上がった尻、むっちりした脚線、どれをとっても艶めかしく美しい。

脚だけでなく、コスチュームの胸の中心からへその下まで、稲妻の形に透明になっているので、胸の谷間があらわになっているのもセクシーだ。

魅惑の肉体のあちこちを露出しながら、顔には目のまわりを隠す赤いアイマスクを着けている。しかし覗いている切れ長の目や、高い鼻、すっきりした唇だけでも、成熟した美女だとわかった。

長い後ろ髪を一本の縄のように結って、背中の中ほどまで垂らした髪型が、大人の美貌と面白いミスマッチを作っている。

女を見たグレートウォールが反応する前に、女が告げた。

「あら。超能力頼りの犯罪者だと思ったけれど、予想以上に頑健な肉体なのね」

言葉の途中で、女の身体が左脚を軸にして回転した。右足の赤いロングブーツの先端がパリパリと電光をまとい、グレートウォールの側頭部にたたきこまれる。さらに軸足を入れ換えてもう半回転。左足の電撃付きブーツの先端が同じ側頭部に入った。

「ごっ」

短く小さなうめきを発して、グレートウォールは自らが集めた石壁に顔面からぶつかる。一度だけ、釣り上げられた魚のように痙攣して、動かなくなつた。

女はハイキックを決めると、きれいに両脚をそろえて動きを止め、演武を終えた武術家のごとく大きく息を吐いた。

凄まじい早業に目を奪われていたリンダが、ようやく声をあげた。

「サンダークラップスのリーダー！ 『スターサンダー』！ ジャパニーズ・アメーzing・スーパヒーロー！」

スターサンダーの本名は鈴堂麗^{りんどうれい}。二十六歳。もちろん赤いアイマスクの下の素顔をふくめて、プライベートはすべて秘密だ。

麗は宇宙人の父と地球人の母のハーフ。身体から電気を発して、自在に操る能力は、星を超えた二つの種族の融合で生まれたミュータントパワーといえよう。

スターサンダーはバリアの中の女たちに手を振った。

「安心してください。わたくしたちがリンダ嬢とSPさんを必ず護ります」

そして右耳に収めた通信機を通じて、今も石壁の下に埋もれて姿を確認できないローズデバイスに語りかける。

「大丈夫かしら」

「はい。もうすぐ外へ出られます。グレートウォールで暗殺者は終わりでしょうか」

「オセロットが、まだなにかを感じる、と言っていたわ。気をつけてね」

その言葉が終わらぬうちに、アスファルトの一角にあるマンホールの蓋が跳ね上がり、異様なものが出現した。

何本もの人間の腕だ。

たくましい男の腕、華奢な女の腕、小さな子供の腕、形状はいろいろだが、どの腕も文字通り生気がなく、青白い。あちこちに大きな傷があり、青い肉が覗き、黒ずんだ血があふれている。

「いたわ！」

スターサンダーは両手から電光をほとばしらせ、横向きの稲妻を奇怪な腕に襲いかからせた。

だが電撃を浴びた腕に、なんの変化もない。不気味な腕の束が電撃に撃たれつつけながらゴムのように長さを伸ばして、バリアへと押し寄せた。

言語ではなく数式でしか表現できないバリアの存在を、この場ではローズデバイスだけが認識できる。破壊ビームも石壁もさえぎった不可視のバリアの表面に、いくつもの不気味な指が触れた。いかなる物体やエネルギーであろうと、必ず止められる、とローズデバ

イスは確信していた。

「嘘っ！」

ローズデバイスはいくつものドローンのカメラを通じて見た。そのまま指が、手、なにも存在しないように自分のバリアをすり抜ける光景を。腕の群れが透明な壁を難なく通り抜けて、リンダに迫っていく。

悲鳴を上げるリンダの前に、SPが壁を作る。警護対象者の盾となつて死ぬ訓練を受けてきた三人の女たちの顔に、ありありと恐怖の色が現れた。

理性や知性ではなく本能が理解した。目の前にあるものは、彼女たちが覚悟した死ではなく、それよりも恐ろしいもの。死をだいなしにするものだ、と。悲鳴をあげて逃げ出さないのは、任務への忠誠心からではなく、ただひたすら恐怖で全身が痺れて脚が動かないためだ。

青白い指先が三人の引きつる顔に触れる寸前に、腕が止まった。まるで映像を逆転再生するかのように傷ついた腕が後退して、マンホールの中へ消える。

直後に、マンホールから黄色い影が跳び出した。空中で丸くなつて一回転すると、アスファルトにスタツと二本足で立つ。

それは女の獣人。

しなやかな体形は人間の女のもの。左右の乳房はふくらみ、尻は挑発的なラインを描く。その全身が獣の体毛で被われて、明るい黄色の地に黒い斑点がちりばめられている。

体毛だけでなく、頭の上には三角形の獣の耳がピンツと立ち、尻の谷間の上からは黄色と黒のリングが連なる長いしっぽが生えている。

髪のかわりに黄色いたてがみがあり、瞳孔は猫さながらに縦に細い。

全身のどこを見ても、衣服や靴やアクセサリーなどの人工物は身に着けていない。獣毛でわからないが、ひよつとして全裸なのではないか、と思わせる容姿だ。

リンダが叫ぶ。

「サンダークラップスの『オセロット』！」

そのヒーローネームは、南アメリカ大陸のジャングルに生息するネコ科の猛獣の名称。変身前の本名は柳イザベラ^{やなぎ}美果^{みか}。十八歳だ。

「ジャパニーズ・ファビュラス・スーパードット……」

リンダの言葉が途中で消えて、恐怖にかすれた息に変化した。

オセロットの後を追って、マンホールから男が現れた。スキンヘッドで、頬がこけた、年齢のわからない男だ。身に着けているのは有名な高級ブランドの黒いスーツ。ネクタイも黒く、立派な喪服に見える。ただマンホールの中にいたおかげで酷く汚れていた。

だが男の顔や服装など、誰も気にしていない。スーパーヒーローたちも、リンダとSPたちも、男の周囲に現れた大勢の人々に目を奪われている。

何十人も老若男女が、スキンヘッドの左右に広がった。性別も、年齢も、服装もバラバラだが、全員が青白い身体にあからさまな致命傷を受けて、青黒い血を流している。

空気が凍りつくような気があふれるなかで、オセロットだけが陽気な声を出した。

「あの『幽霊を飼ひ馴らす者』と名乗るやつは、科学じゃ相手できない。死者の霊を使っている。こいつはシャーマンのボクの領分だよ！」

美果はある理由で、南アメリカ大陸の大いなる精霊たちに認められて、南米有数のシャーマンとなった。人間から猫の獣人の姿に変身するのも、科学技術ではなく精霊譲りの秘法だ。

尻のしっぽをまっすぐに立てて、鋭い爪が生えた足でアスファルトを蹴り、オセロットは自分から死霊の群れに跳びこんだ。

スキンヘッドの男ゴーストティマーは傲岸かつ陰気な笑いを浮かべ、死霊たちへ命じる。「我が忠実なる無敵の怨霊ども、あの馬鹿な獣をバラバラに引き裂いて、おまえたちの仲間にしてやれ」

死霊たちが無言で路面を滑るように押し寄せて、オセロットの周囲を埋めつくす。この

ままた死者の群れに呑みこまれると見えたととき、オセロットの両腕からそれぞれ一匹ずつ、南アメリカに棲む大蛇アナコンダが現れた。

今は獣毛で隠れて見えないが、両手の甲に彫られた聖なるタトウーからアナコンダの精霊を召喚したのだ。

生物としてのアナコンダは九メートルが最大とされるが、精霊に限界はない。二匹のアナコンダが目にもとまらぬスピードで空中を這い進み、何十人もの死霊に巻きついていく。ローズデバイスの超科学バリアもスターサンダーの電撃も捕らえられなかった死霊たちを、蛇体がひとつに縛りあげた。

死霊たちは腕を所在なげに揺らめかすだけで、その場から動けなくなっていた。

ゴーストテイマーはこんな事態に遭遇したのは、はじめてなのだろう。目を見開き、焦った大声を出す。

「なにをしている！ 怨霊をはばめるものなどないはずだ！」

「この人たちは怨霊じゃない！」

死霊にかこまれたオセロットが怒号を放った。

「普通に死んで、未練なしに安息の世界へ行くはずだったのを、おまえが霊体を傷つけて、無理やりに奴隷にしたんだ！ こんな悪辣な死者の冒涇を、ボクは絶対に許さないッ！」

靈力のこもった咆哮が空気を揺るがし、ゴーストティマーの顔と頭の皮をピリピリと震わせた。

「ボクがみんなを安息の場所へ連れていく。そのまましばらく待っていて」

「くそっ。猫女め、覚えていろ！」

自分の不利を悟ったゴーストティマーが、子供のような捨て台詞を吐いて、くるりと背を向けて走り出した。

オセロットの身体が死霊たちの中から高く跳躍し、空中できれいに回転して、ゴーストティマーの汚れた喪服の背中に着地する。アスファルトに押し倒され、胸を強く打ったゴーストティマーの口から、声にならない息があふれた。

喪服に馬乗りになったオセロットは、右手でゴーストティマーの首根っこをつかむ。

「今のボクは、生きている人を守るスーパーヒーローじゃない。死者を護るシャーマンだ。おまえには死の秩序を乱した罰を下してやるからな！」

左手の指を大きく広げて、ゴーストティマーの顔をつかんだ。五本の指先から伸びる鋭い猫科の猛獣の爪が、額や頬に食いこむ。

「は、離せ！ うわあっ！」

鼻と口に押しつけられた手のひらの表面から、黒いものがうねうねと湧き出した。

「アマゾンの蛭の精霊だ。おまえの身体の中に入って、内側から血を飲みつくすぞ。カラのカラの死体になれ」

「ひいひいひいひい………」

ゴーストテイマーの悲鳴がすぐに小さくなり、かき消えた。口の中いっぱい蠢く蛭の群れに喉をふさがれたのだ。口だけでなく二つの鼻孔にも、耳の穴にも、さらに眼孔の隙間にも、強引に蛭が潜りこむ。蛭まみれの顔が恐怖に歪み、引きつり、こわばり、朦朧となり、そのまま意識を失っていった。

途端に、蛭がすべてオセロットの左手にもどった。

「ふん、ちよつとビビらせたただだよ。スーパーヒーローのボクが、本気で人を殺すわけではない。ジャングルの外では、人間の法律に従わなくちゃならないし、はっ！」

オセロットの獣耳が動き、空中から聞こえる音をとらえた。スターサンダーも、石壁の下から出たローズデバイスも、空を見上げる。

青空に浮かんだ小さな一点がたちまち大きくなり、からみ合って落下してくるフレアとレインボーバタフライの姿になる。あわててスターサンダーとローズデバイスが駆けだし、場所を空けた。

フレアは両手でレインボーバタフライの顔をつかんで、猛烈な速度でまっすぐに地表へ

向けて飛んだ。レインボーバタフライがフレアの手をはずそうともがき、背中の虹色の羽をはためかせる。だが羽根はボロボロになり、面積は三分の一に減っている。

フレアはレインボーバタフライのあがきをものともせず、相手の頭頂部をアスファルトにたたきつけた。

普通の人間ならば、首から上が粉碎されて、頭蓋骨と脳を広範囲にぶちまけるところだ。しかし砕けたのはアスファルトのほうだった。フレアは上空で殴り合って、レインボーバタフライの肉体の耐久力を読み取っていた。

クレーターののように陥没した底から、レインボーバタフライが虚ろな顔つきでフレアを見上げて、そのまま気絶した。

かわりにリンダが歓声をほとばしらせる。

「サンダークラップス！ サンダークラップスの四人がそろってる！ サンダークラップスが、わたしたちを助けてくれた！」

リンダは安心してポケットからスマートフォンを出し、四人のスーパーヒーローへ向けて連写をはじめた。

「でも、わたしたちが襲われるとわかっていて、待ち伏せしていたの？」

「それは」

と、フレアが口を開く。だが先にスターサンダーが声を高くして、リンダへ向けて堂々と宣言した。

「ある筋からエンフォーサーズ・オブ・エヴィルがテロの依頼を受けて、池袋に潜伏しているという情報を得て、事前に動いていましたの！ 標的まではわからなかったから、リンダさんを怖い目に遭わせてしまつて、もうしわけありませんわ！」

フレアは苦笑するしかない。

（本当は、麗がみらくるワッフルにはまつて、一人一種しかもらえないCDの購入特典を四種類すべてコンプリートするために、サンダークラブスの全員が駆り出されて、行列に並んでいたなんて、言えないよなあ。スーパーヒーローとしては）

ましてや麗が用意した、みらくるワッフルの顔写真を前後に大きくプリントした公式トレーナーを、四人全員が着ていたとは、フレア本人も言いたくない。

「警視庁の超犯罪課が到着するまでは」

ふいにフレアの身体に影が落ちた。

はっ、と顔を上げると、空中に女がひとり、浮いている。

全身を黒い鎧のようなもので覆った、二メートル近い巨躯の女だ。サンダークラブスを見下ろす頭部だけはあらわで、荘厳な美貌が侵し難いオーラを放っている。

背中には、柄の部分が白く輝く大きな斧を背負っているのが見えた。

「えっ、『^{ノースウインド}北風』!? どうして東京に? それに」

ノースウインドは北海道を代表する女性スーパヒーローだ。神秘の力に裏打ちされた実力も実績も、日本有数のもの。すでに十年に渡って北の大地を護りつづけている。サンダークラップスの四人も、ノースウインドが逃亡したオフビート犯罪者を追って東京へ来たときに会ったことがあった。

この十年間、ノースウインドは何度かコスチュームを変えているが、常に白かった。白こそノースウインドのシンボルカラー。だからこそ、フレアはたずねないではいけない。「どうして黒いコスチューム?」

返答のかわりにノースウインドのたくましい右腕が掲げられた。背中の斧がひとりでに動き、白い柄が右手に納まった。

腕のひと振り、斧が回転してフレアへ向けて飛んでくる。そのスピードは普通の人間の目には追えず、リンダには斧が消えたと思えた。

次の瞬間には、フレアが身体の前で、両手で斧を受け止めた。凄まじい衝撃が全身に轟き、人間をはるかに超える強靱さを持つ筋肉も骨もギシギシときしむ。

「うあっ!」

フレアの身体が後ろへ十数メートルも移動する。両足がアスファルトを削り、二筋の溝が穿たれた。アイヌの神から賜ったという聖なる斧の威力に驚嘆させられる。

「ノースウィンド、なにをするんですか、うつ」

フレアの背後から、顔の前へ手が伸びた。今の今まで、そこに人がいるとは、フレアだけでなく、三人のチームメイトも、リンダとSPも気づかなかった。人間の視覚だけでなく、ローズデバイスのあらゆるセンサーからも隠れる完璧な気配の消し方だ。

スターサンダーが叫んだ。

『^{レッドウィドウ}赤い未亡人』！ どうして!？」

レッドウィドウは横浜の夜の番人と呼ばれる女性スーパーヒーロー。中国奥地のある少数民族の女だけに伝承される超絶武術の女仙拳の達人だ。

名前の通り赤いチャイナ服と赤いアイマスクをコスチュームとするはずの未亡人スーパーヒーローが、今は黒いチャイナ服とアイマスクを着けている。

黒いレッドウィドウが右手を離すと、フレアの顔面に黒いヒトデのようなものが貼りついて、目も鼻も口もふさいでいる。ふざけた仮装のような見た目になるが、フレアはノースウィンドの斧を握りしめたまま身動きしないで立ちつくしている。

スターサンダーが、ローズデバイスにリンダたちを守るように伝えて、フレアへ向かつ

て走りだした。オセロットも同時に駆ける。

二人が三歩目の足をつくまえに、フレアとレッドウイドウの姿が消えた。同時に空中のノースウインドも消える。

後には啞然とするチームメイトが残されるばかりだった。

ビュル！ ビュルビュル！ バシユウウウツツ！

また解放された乳首が白い噴水をまき散らし、高々と白い飛沫を飛ばして、見つめる者たちの上に白い雨を降らせる。

二度目の母乳の絶頂噴火が終わるとともに、フレアは瞳を陵辱者へ向けた。

「どうして？」

「途中で胸の愛撫を止めたのか、と聞きたいのかな。一度にやりすぎても面白みがないのだよ。もっとじっくりと、ひとつひとつ楽しもうではないか」

床の触手の束の中から、新たな一本が鎌首を立ち上げて、フレアの広げられた股間へと接近してくる。見せつけるように、恥丘の前でまたも触手の先端が形を変えた。今度は花のように開くのではなく、ふくらみ、くびれて、亀頭の形を作った。最先端にはご丁寧な鈴口の切れ目まである見事な模写だ。粘液にまみれて黒光りしているのが、本物よりもいっそう獰猛に見える。

（大きい！）

フレアの男性経験は少ないが、ひと目でそう思われる。あからさまな形状を見るだけでも、触手の意図は明らかだ。

（わたしの中に入ってくるつもりなの！ ああっ！）

フレアが想像していたところとは異なる場所に、触手が押しつけられた。内腿の間をくぐり、尻の谷間の奥にある細密な皺の蕾に、黒くぬめつく触手亀頭が触れる。

「あくううっ！」

フレアの尻の体熱が上昇して、ビクンと跳ね上がった。

「そこは！」

はじめてではないが、もう長い間、誰にも触れられていない。サンダークラップスが父親に囚われたときに、女性器だけでなく肛門の処女も強奪された。父を倒した後は、静子に後ろの肉孔を愛撫されたことはない。

肛門に押しつけられる触手を、括約筋を強く締めて拒否する。その間にも、尻の中がメラメラと燃え盛った。

「無駄な抵抗なのだよ、フレア君。僕のダークパラサイトの粘液が浸透した女の身体は、肉の快楽を拒むことは不可能さ」

マスター・パラサイトの嘘くさいさわやかな笑い声とともに、フレアの尻のすばまりが自らほころび、本人の意志に反して黒亀頭を迎え入れる。

（だっ、だめえっ！）

ゆるんだ肛門をさらに押し広げて、亀頭がずぶりと内側に潜りこんだ。

「あひいっ！」

フレアは何度も尻を振りたくったが、亀頭を抜くことはかなわない。排出するための器官に侵入物を受け入れると、甘い愉悦がぐつぐつと湧き上がった。

「はっあああ、や、やめろ！ あんん、出ていけ！ んっううう！」

尻をえぐられる快楽に潤むフレアの瞳に、触手の新たな変形が映った。潜入した肛門から股間をくぐって伸びる触手の表面に、丸い突起がいくつも現れる。黒いとうもろこし、いや黒い海ぶどうを思わせる不気味で淫靡な姿だ。

亀頭が大きくうねって前へ進むと、触手に並ぶつぶつぶが肛門の縁を弾きながら、尻の中へ押し入っていく。

「はひ！ あっ、あくっ、あおおおお！」

亀頭に腸壁をえぐられて、強引に押し広げられ、つぶつぶ突起に腸粘膜を次々とつつかれる。人間の男のペニスでは不可能な刺激の連続に襲われ、尻の中で多数の快感の泡が浮上してはパチパチと割れつづけた。

「あ、あああ、あつくううう！」

奥まで進んだ触手亀頭が、後退をはじめ。また表面のつぶつぶに腸を撚られ、亀頭のふくらみに削られて、猛々しい悦楽がほとばしる。望まぬ尻の快感とともに、触手に引き

ずられて、魂そのものが肛門の外へ出ていく気がした。はたして人造物の自分の身体に魂が存在するのか、フレアは常々疑問に感じているが。

肛門の縁をめぐって後退する触手が、亀頭を中に残して止まった。一転して再び肛門の中へ潜入して、尻の中で鰻が暴れるようにくねりまわる。

フレアは操り人形のごとく腰を前後左右に振りたてた。

「はううっ！ お尻が！ お尻がおかしくなるう！」

「おかしくなるのではない。僕のコレクションとして正しくなるのだよ。さあ、僕のダークパラサイトとひとつになれ！」

マスター・パラサイトの命令に合わせて、触手亀頭が尻の奥で猛烈な勢いで射精した。本物の精液ではないだろうが、熱い粘液が鈴口から大量に噴出して、腸粘膜を激しくたたく。鈴口だけでなく、同時に肉幹部分を被う多数の突起からも、いっせいに粘液が吐き出された。

「はおううおおおっ！ 熱いっ！」

叫ぶフレアの尻の内側に、粘液がパンパンにつめこまれる。触手を吞んで広がった肛門から、収まりきらない粘液がドブドブとあふれ出し、フレアの足と床を濡らした。

「熱い！ あああ、お尻が熱い！ お尻がああ！」

爆発した。腸内に射精されて、一気に絶頂の高みへ吹き飛ばされてしまう。

「イクッ！ お尻がイッチャうううッッ!!」

エクスタシーの大波に呑みこまれて溺れるフレアの恥丘に、もう一本の黒い触手がぶつかった。触手の先端はすでに亀頭に変貌していて、幹に丸い突起をびっしりと生やして、恥丘の中心に走る縦の溝に粘液をなすりつける。

今まで閉じていた肉唇が、触手亀頭のうねりでこじ開けられた。女花がほころぶとともに愛液があふれ出て、亀頭に浴びせる。

開花した女性器は、射乳絶頂と肛門のエクスタシーの業火にあぶられて、大量の花蜜を滴らせていた。女肉の精妙な構造のすべてが濡れて、キラキラと輝く。充血した肉壁がふるふるとわななき、クリトリスがぷつくりとふくらんで、刺激を待ちわびてひくついている。

自らの恥ずかしい体液にまみれた亀頭が、肉壁の中心に触れると、やすやすと膣口が広がった。フレアは自身の肉体が触手の陵辱を望んでいる気がして、敵以上に自分に怒りが湧く。しかし触手に膣を貫かれると、女体の中心から噴き上がってくる快感のマグマに呑みこまれて、憤怒の炎などあつという間に燃えつきてしまう。

「はああつ、だめえっ！ あうっ、熱いっ！」

黒い亀頭が膣の奥底まで届き、膣内がつぶつぶで埋めつくされると同時に、触手のほうも焦らされて我慢ができなかったかのように粘液を吐き散らした。

「熱ひいいっ！ イッチャう！」

体内の触手の大量射精に押し上げられて、フレアもまた瞬時に絶頂の高みへ飛翔させられる。前後の肉の穴に触手を深々と呑みこんだ裸身を痙攣させて、叫び声を高い天井に反響させた。

「ああおおおお、イクうううう————ッッ!!」

自分の随喜の悲鳴を聞きながら、体内のどこかにあるスイッチが入る音を感じた。あの時以来、一度も入っていないスイッチが、異常すぎる暴虐と悦楽の嵐の中で起動した。

「あああつ、だめ！ 出てはだめ、はううつ……………」

フレアの叫びがブツンと途絶えた。肉体が変化する衝撃に打たれて、息もできない。

黒い触手を挿入されて限界まで広げられた女性器の上部、はちきれそうに勃起するクリトリスのさらに上から、一気に肉の棒が出現して、先端から白い液体を盛大に噴出する。

ビルルル！ ビリュウルルルル！ ビッシャアアアアッッ！

乳首からの射乳より高く、より激しく、より大量に、白い体液を飛ばしつづける肉棒の先端には、フレアの中にねじこまれている触手同様に包皮の剥けた亀頭がある。触手亀頭

の黒光りと違い、フレアの亀頭は普通の人間の男と変わらない体色だ。濃いピンクに色づき、パンパンに張りつめて、鈴口から白い体液を吐き出しつづけている。

間違いない男性器が、フレアの女性器のすぐ上からそそり勃っていた。それも並の男よりも長さも太さも立派な逸品。

窒息をとまなうショックから醒めたフレアは、今もつづく猛烈な射精の快感に脊髄を貫かれ、なにも考えられずに恥ずかしい絶頂の言葉を飛ばしてしまふ。

「出るうっ！ わたしの精液出てるうう！ おおおうう、気持ちよすぎる！ わたしのペニスがイクふううううッッ!!」

マスター・パラサイトもさすがに啞然とした顔で、フレアが亀頭を振りたてて精液を飛ばす姿を凝視する。

やがて精液の勢いがゆるやかになり、未練があるようにゆつくりと止まった。

「はあああああ……ああんん……あふ………」

フレアは途切れ途切れに粘つく息を吐きながら、また全身を脱力させて、両腕を縛る触手にぶら下がった。うなだれた顔が、自分の股間から屹立する男根と向かい合ってしまう。普通の男ではありえない膨大な精液を吐き出しても、フレアのペニスはまったく萎えていないどころか、いっそう力強く天を突くように勃起して、まだ出したりないとはかりに

亀頭を前後にビクッビクッと振りつづけている。

これも父親がフレアを造ったときにつけたものだ。二度と目にすることはないと思っていた。しかし眼前の男根は、再び外に出られたことを祝って、今まで溜めこんでいたものをすべて撃ち出したがっているように見える。

マスター・パラサイトの言葉も、フレアの耳をぼんやりと通り過ぎた。

「なんともはや、これは驚嘆すべきことなのだよ。身体から翼や角やしっぽなどいろんなものを生やすオブビートは世界中にいるが、ペニスを生やすオブビートは見たことも聞いたこともない。ペニスを見せびらかすオブビートがいても、ニュースにしようがないだろうがね。その奇跡の逸物も、僕のダークパラサイトのものにしてあげよう」

三本目の触手が立ち上がった。今までの触手よりも太い。フレアが目を向けると、先端が四つに割れて、内側の穴を濃いピンクに色づく亀頭に迫らせる。

大蛇が獲物を呑むように、触手の中に亀頭がすっぽりと入った。

「ひゃい！」

触手の内側の粘膜に亀頭全体をこすられて、鮮烈な快感の火花が飛ぶ。触手が内壁をペニスに密着させて、ずるずると前へ進み、男根全体を呑みこんで、先端を肉幹が生える下腹部へ押しつけた。

鈴口から付け根まで温かい肉粘膜にびっちり包みこまれて、うねうねと蠢かれる。ペニスをあらゆる方向から揉みこまれ、強く前後にしごかれた。

「あきいいい！ くっはっあああ！」

触手の開いた黒い花びらの一枚が動き、ふくらんだ陰核に覆いかぶさってきて、包みこまれた。女の急所も、男根同様に揉みたてられる。

さらに今まで離れていた二本の触手が、左右の勃起乳首と乳肉に喰らいついた。再び乳首が引きちぎられる勢いで吸引される。

膣、クリトリス、肛門、乳首を同時に責められて、フレアの意識が真っ白になる。首が反りかえり、喉が激しく震えて、天井へ向かって甲高い叫びが噴き上がる。

「あああああああああああああ、おごっ」

大きく開いた口に、黒い触手が潜りこみ、食道の中まで侵入してきた。フレアの涙に潤む目に、触手が伸びる先が映る。口と喉を犯す触手は、床の束からではなく、マスター・パラサイトの黒いガウンの右袖の中から伸びていた。

気づいた瞬間に、すべての触手から粘液が放出された。膣と腸の中だけでなく、左右の乳首の乳道とペニスの尿道の中に、粘液が逆流してくる。叫び声をあげたくても、喉の中も粘液で埋まり、胃の中まで流れこんだ。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

正義のスーパーヒーローチームの原点！

二次元ドリームノベルズ

サンダー クラブス！

淫獄の四天使

小説：羽沢向一

挿絵：カワギシケイタロウ

全国書店、各電子書籍サイトに好評発売中！



シリーズ作品の電子書籍版も
近日配信予定！